

Title	青年期の妄想的観念と自意識・他者意識の関連
Author(s)	石光, 美紀
Citation	大阪大学教育学年報. 2006, 11, p. 57-68
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5674">https://doi.org/10.18910/5674</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 青年期の妄想的観念と自意識・他者意識の関連

石 光 美 紀

### 【要旨】

丹野・石垣らによるPDI (Peters et al Delusion Inventory) 日本語版に関する先行研究を踏まえ、本研究では、PDIの項目再検討を主たる目的として、調査・分析を行った。その結果、PDIに十分な信頼性のあることが再検証された。また、自意識及び他者意識との関連を調べた結果、自意識の高い者はPDIの得点が高く、妄想的観念を抱きやすいことがわかった。さらに、自意識・他者意識の下位尺度とPDIとの関連を分析した所、公的自意識と空想的他者の得点の高い者が、妄想的観念を抱きやすく、また、その妄想の苦痛度・心的占有度・確信度共に強いという結果が得られた。これは、先行研究の結果と照らし合わせても、PDIが妄想的観念を測るにあたって極めて妥当な尺度である事を示していると言える。とはいえ、本調査では、被験者数が少なく詳細な分析が困難であった。従って、今後は被験者数やPDIの項目内容にも十分配慮した上で、綿密な研究を続けてゆきたいと考えている。

### 1. はじめに

丹野・森本ら(2004)は、PDIを日本語訳し、信頼性と妥当性を検証した。そして、PDIを用いて統合失調症患者と健常者の妄想的観念を比較した結果、その得点自体の差は得られなかったが、両者間において苦痛度と心的占有度に差がみられたと記している。また、考察では、PDIが妄想すべてを把握できるわけではないとし、今後、項目の改良が必要であると述べている。その他、臨床場面での症状評価だけではなく、健常者を対象とした予防的介入の際にも使用することができるとも示唆している。これを受け、筆者はPDIの項目分析及び尺度の信頼性を検討することにした。PDIは、丹野・石垣ら(2000)が作成した妄想観念チェックリストのように、因子ごとに分かれておらず、妄想的観念の項目の調整が必要となる可能性がある。また、妄想的観念は「他者」の存在が前提となることが多い。丹野(1987)は、自己の中の他者すなわち「内在他者」に焦点を当て、統合失調症における「公的自己意識が私的自己意識を侵害する事態」について論じた。このことを踏まえ、本研究では、内在他者と妄想観念の関係について調べることも目的とし、自意識尺度(菅原、1984)と他者意識尺度(辻、1993)を、PDIと併用して調査に用いることにした。これによって、自意識及び他者意識と妄想観念との関連性を検討したいと考えている。

### 2. 妄想的観念について

#### 1) 妄想の定義

一般的な妄想の定義は、「根拠のない主観的な想像や信念、病的原因によって起り、事実の経験や論理によっては容易に訂正されることがない」と広辞苑に記されている。これは、ごく一般に抱かれている妄想に関するイメージと一致している。しかし、これだけでは臨床的な妄想様の全体を知ることはできない。

心理臨床大事典は、妄想に関して次のように記している。「妄想とは病的な状態から生じた誤った判断あるいは思考内容であり、通常に比べてなみなみならぬ強い確信をもって固持され、いかなる説得や現実体験によっても訂正されず、多少とも現実でありえない側面を含んでいる、という外面的特徴がある」。この方が、前述の定義よりも妄想の有様について具体的にイメージしやすいであろう。

また、DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994)によると、妄想とは、「外的現実に対する間違った推論に基づく誤った確信であり、その矛盾をほとんどの人が確信しており、矛盾に対して反論の余地のない明らかな証明や証拠があるにもかかわらず、強固に維持される」と定義されている。そして、この定義は、Jaspersの古典的な精神病理学に基づいていると言われている(丹野・石垣、2000)。Jaspersは、妄想の特徴として、①主観的に強い確信を持つこと、②経験上こうであるはずだとかこうだからこうなるという正しい論理に従わせることができないこと、③ありえない内容であること、の3点を挙げている。また、Jaspersは、心理学的に了解し得ない“真正妄想”と了解しうる“妄想的観念”に分け、前者は統

合失調症に特有であるとし、後者にはうつ状態や躁状態の妄想、健常者にも見られる支配観念などが含まれるとした。しかし、丹野・石垣らは、「実際には必ずしもこの区別は明確ではなく、統合失調症においても上記の三つの特徴を満たさないような中途半端な妄想も多くみられ、妄想は統合失調症以外の障害にも多く出現し、また、被害妄想的な観念は健常者でも珍しくない」、という見地を示している。

よって、妄想が患者と健常者の間に非連続的に存在するものではなく、境界線を引くことのできない連続的なものであるという見方が強くなってきていると考えられる。先行研究が示すように、確かに、妄想に対して明確な線引きをすることは難しい。従って、本研究においても、患者と健常者の間に区別をつけない立場で“妄想的観念”を取り上げていきたいと思う。

## 2) 妄想の種類

周知の通り、妄想には多様な種類があり、その妄想によって呈する様相も様々である。「一次妄想は統合失調症に特異的に出現されるとされ、比較的急速に、これといった正常心理から了解される理由なしに不合理な思考が起り、直観的に確信されるものである。この体験を正常人が直接追体験することは不可能であり、ただ病者自身の表現や客観的観察をもとに、ある程度の推測的了解を行いうるのみである、という意味で了解不能性をもつ。また一次妄想は、その体験のあり方から、妄想気分、妄想知覚、妄想着想に分類される。それに対して、二次妄想は、環境、体験、性格などに由来したり、一時的な感情状態から導かれたり、幻覚、錯覚などの解釈の結果出現したものとして、心理学的に了解できる妄想であり、元になる体験が消失すれば、妄想も消退する。また、妄想はその主題内容からも分類される。臨床的には、被害妄想、微小妄想、誇大妄想の三群に大別される」(心理臨床大事典, 859頁)。この分類の詳細は、丹野・石垣らの作成した妄想観念チェックリストにも記されている。それによると、妄想的観念の中で負の感情を帯びたものは、疎外観念、微小観念、被害観念、加害観念に、正の感情を帯びたものは、庇護観念、自己肯定観念、被好意観念、他者操作観念にそれぞれ分けられていた。このように、妄想の内容や形態は多岐に渡っており、その全体を網羅することは極めて困難な作業である。

## 3) 妄想と精神・身体的疾患

妄想は統合失調症を初めとした多様な精神的、身体的疾患と深い関係を持っている。「身体的基盤のある状態、器質性精神病、中毒性精神病、てんかん性精神病、老年痴呆などに伴って出現する妄想は、大脳の機能障害から因果関係的に導かれる身体症状と同じ次元の症状ともとらえられるが、メラニコリー気質とか、逆に秩序性を欠如した性格などを有した病者が、身体疾患や性格から孤独になるという状況で出現することも多く、心理学的に了解しうることがある」(心理臨床大事典, 859頁)。

妄想と深い関係のある精神的疾患には、統合失調症、パラノイア、双極性障害、妄想性人格障害などが挙げられるだろう。中でも統合失調症の妄想については、その“奇異さ”について多く語られてきた。「心や体の統制の喪失を表しているような妄想は一般に奇異とされ、これには、外部の力によって自分の考えが引き抜かれてしまったという確信(“思考奪取”)、自分のものではない考えが心の中に入れられてしまったという確信(“思考吹入”)、体や動作が外部の力によって操作されているという確信(“被支配妄想”)などがある」(DSM-IV, 293頁)。一般的には、こういった統合失調症の妄想の特異性がそのまま信じられてきた経緯がある。しかし、丹野・石垣ら(2000)は、健常者も、患者と同じく、場合によっては患者以上に妄想様観念を有する可能性のあることを示している。これは、妄想という現象が、健常者と患者の明確な区別なく起り得るものであるということを表すものである。

それから、DSM-IVには、統合失調症の他に妄想性障害(Delusional Disorder)の診断的特徴が記されている。その診断基準は、Table1のようになっている(DSM-IV, 319頁)。また、妄想性障害とは対照的に、妄想性人格障害(Paranoid Personality Disorder)では、明らかなまたは持続的な妄想的確信はない。その診断基準を以下に記載する(Table2)。これらを見ると、妄想が広範囲の疾患に出現するものであることがよくわかる。さらに、内容を吟味してみると、後述するPDIの項目や自意識・他者意識に非常に関連があるように思われた。妄想の大半は、それが実在するかどうかは別として、自己の内部で「他者」の

存在を前提として出現している。その他者は、身近な人物であったり、神や仏であったりするが、筆者には妄想が「自己の内部に存在している他者」との対話や格闘のように思えてならないのである。この内的な他者との関係は、後の自意識・他者意識の項で記述する。

**Table 1 妄想性障害 (Delusional Disorder) の診断基準**

- A. 奇異でない内容の妄想 (すなわち、現実生活で起こる状況に関するもの、例えば追跡されている、毒を盛られている、病気をうつされる、遠く離れた人に愛される、配偶者や恋人に裏切られる、病気にかかっている) が少なくとも一ヶ月間持続する。
- B. 精神分裂病の基準 A を満たしていないこと 注: 妄想性障害において、妄想主題に関連したものならば幻触や幻嗅が出現してもよい。
- C. 妄想またはその発展の直接的影響以外に、機能は著しく障害されておらず、行動も目立って風変わりであったり奇妙ではない
- D. 気分エピソードが妄想と同時に生じていたとしても、その持続期間の合計は、妄想の持続期間と比べて短い。
- E. その障害は物質 (例: 乱用薬物、投薬) や一般身体疾患による直接的な生理学作用によるものではない

**Table 2 妄想性人格障害 (Paranoid Personality Disorder) の診断基準**

- A. 他人の動機を悪意のあるものと解釈するといった、広範囲な不信と疑い深さが成人期早期までに始まり、種々の状況で明らかになる。以下のうち4つ (またはそれ以上) によって示される。
    - (1) 十分な根拠もないのに、他人が自分を利用する、危害を加える、またはだますという疑いをもつ。
    - (2) 友人または仲間の誠実さや信頼を不当に疑い、それに心を奪われている。
    - (3) 情報が自分に不利に用いられるという根拠のない恐れのために、他人に秘密を打ち明けたがらない。
    - (4) 悪意のない言葉や出来事の中に、自分をけなす、または脅す意味が隠されていると読む。
    - (5) 恨みをいだき続ける。つまり、侮辱されたこと、傷つけられたこと、または軽蔑されたことを許さない。
    - (6) 自分の性格または評判に対して他人にはわからないような攻撃を感じ取り、すぐに怒って反応する、または逆襲する。
    - (7) 配偶者または性的伴侶の貞節に対して、繰り返し道理に合わない疑念をもつ。
  - B. 精神分裂病、「気分障害、精神病性の特徴を伴うもの」、または他の精神病性障害の経過中のみおこるものではなく、一般身体疾患の直接的な生理学的作用によるものでもない。
- 注: 精神分裂病の発症前に基準が満たされている場合には、「病前」と付け加える。例: “妄想性人格障害 (病前)”

### 3. PDI とその他の妄想に関する尺度

#### 1) PDI の概要

Petersら (1999) は、①簡便な症状評価と②連続的な測定の実現するために、妄想と妄想的観念の両方を測定する自己記入方式尺度 PDI (Peters et al Delusions Inventory) を開発した。山崎ら (2004) は、PDI を日本語訳し、その信頼性と妥当性の検証を試みた。PDI は、現在症診察表の質問項目をもとに作成された 40 項目から構成されている。被験者はまず妄想について記述された項目について、思い浮かんだことがあるかどうかを 2 件法 (はい・いいえ) で回答する。40 項目のうち「はい」と回答した項目については、「思い浮かんだときにどのくらい苦しいか (苦痛度)」、「どのくらい頻繁に思い浮かべるか (心

的占有度)、「どのくらい本当だと思うか(確信度)」を5件法で評定する。そして、それぞれの値を個人ごとに集計し、妄想得点(40項目のうち「はい」と回答した数)・苦痛度・心的占有度・確信度の4つの次元について得点を算出できるようになっている。なお、本研究においては、妄想得点を「YBS得点」と称して記述している。

山崎らによると、PDIの信頼性は検証されたが、妥当性については全ての妄想をカバーするには不十分であるという結果が出ている。また、彼らは、PDIが統合失調症患者の妄想の一部しか測定できていないことにも言及し、①妄想は「ある-なし」で測定できるような単純な現象とは言いにくく、多次的な現象と考えられること、②患者と健常者では、苦痛度と心的占有度の次元で差があることが示唆された、と述べている。このことから、PDIは高い信頼性を有するものの、妄想のすべてを把握できるわけではないことがわかる。本論では、先行研究を踏まえ、項目の改良も視野に入れたPDIの再検証という目的意識を持って調査研究を行うものとする。

## 2) 妄想観念チェックリスト(DICL)とPDI

PDIの他に妄想的観念を測定する尺度として、この項では、丹野・石垣ら(2000)の作成した妄想観念チェックリスト(Delusional Ideation Check-List)を挙げようと思う。DICLは負の感情をもつ30項目と正の感情をもつ21項目の計51項目からなる質問紙である。それぞれの項目について、「全くない」、「たまにある」、「よくある」の3件法で回答を求め、それぞれ1, 2, 3と配点する。因子分析の結果、疎外観念、微小観念、被害観念、加害観念、庇護観念、自己肯定観念、被好意観念、他者操作観念の8つの尺度に分かれ、広範囲の観念を扱うことができることが特徴となっている。これに対して、PDIはDICLほど項目に多様性が見られないため、妄想的観念を広範囲で捉えられることは難しいかもしれない。

さらに、DICLを用いた調査結果には、健常大学生の多くが妄想と同じ内容の観念を体験しており、特に、疎外・微小・加害などの観念はほとんど全員が体験していたことが明らかになったと報告されている。これは、健常者もかなりの割合で妄想的観念を抱くということを検証するものであり、妄想的観念が非連続的でないものであることに繋がる結果である。従って、本調査でPDIを使用する際も、妄想の非連続性について考慮する事を忘れてはならないであろう。

## 4. 妄想と自意識・他者意識

### 1) 自意識尺度と他者意識尺度

妄想が「他者の存在」と深く関わっているという推察は先にも述べた。そこで、本項では、妄想と関係があると思われる自意識と他者意識について再確認することを目的とする。

まず、自意識尺度は、自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人差(自意識特性)を測定するもので、菅原(1984)が開発した。この尺度は公的自意識と私的自意識の2つの下位尺度によって構成されている。私的自意識とは、自分の内面・気分など、外からは見えない自己の側面に注意を向ける程度の個人差を示すものであり、公的自意識は、自分の外見や他者に対する行動など、外から見える自己の側面に注意を向ける程度の個人差を示すものである。

次に、他者意識尺度であるが、この尺度は辻(1993)によって開発された、他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定する為の尺度である。他者意識尺度は、以下の3つの下位尺度から構成されている。①他者の気持ちや感情などの内的情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識や関心を「内的他者意識」といい、②他者の化粧や服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への関心を「外的他者意識」という。また、③他者について考えたり、空想をめぐらせたりしながら、その空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向を「空想的他者意識」という。筆者は、この「空想的他者意識」が、後述の「内在他者」に近い要素を持ち、妄想的観念と関連があるのではないかと考えている。

そこで、本論では、これらの自意識・他者意識尺度とPDIを共に用い、その関連性を明らかにすることを目的の一つとする。

## 2) 妄想と内在他者について

丹野ら(1987)は、統合失調症の自己論的解釈の中で、公的自意識における「他者」とは、「他者一般のイメージ」とも言うべきであり、他者が自分の中に内在化されたものとしている。そして、そのイメージを現実の他者と区別して、「内在他者」と呼んでいる。そして、公的自意識が私的自意識を侵害する事態について以下のように言及している。公的自意識の高まりによって、相対的に私的自意識が衰弱し、自己の他者化がさらに進めば、「自分が～する」という能動性を弱め、「他者が～する」という感じを強める。この状態を、自己逆転の現象という。つまり、他者が自分の中に侵入し、自分の行為の主体性が他者に奪われ、自分と入れ代わったような感じとして体験されるのである。これは、肥大化した内在他者があたかも実在する他者のように感じられ、それによって私的自意識が侵害されるという病的で深刻な事態である。この状態が重篤になれば、自他の間がつつぬけとなるような統合失調症の症状に繋がってゆく。

ともかく、「内在他者」すなわち自己の中にある他者イメージは、妄想的観念と結びつきやすいことは確かであろう。さらに、内在他者に近接したものとして、先に挙げた「空想的他者意識」がある。筆者は、この「空想的他者意識」が妄想的観念と何らかの関わりがあるのではないかという仮説のもとに、以下のような調査・分析を行った。

## 5. 方法

予備的研究ということもあり、また、健常者の中にもしばしば妄想的観念がみられるという先行研究の結果から、健常大学生を対象とし、大学の講義時間を利用して質問紙調査(PDI日本語版・自意識尺度・他者意識尺度)を実施した。さらに、本調査で有効回答が得られた100名(男性54名、女性46名)について統計的検定を行った。対象者の平均年齢は、19.79(19～25)歳であった。なお、実際に配布したPDIの質問項目を巻末に添付する。

## 6. 結果と考察

### 1) PDIの信頼性と項目分析

内的整合性の指標である $\alpha$ 係数=0.84は、先行研究に近く、比較的高い値であった。このことから、PDIが安定した指標であることが再確認された。また、自意識尺度については $\alpha=0.84$ 、他者意識尺度でも $\alpha=0.86$ という高い信頼係数が得られた。次に、PDIにおいて、「はい」と答えた項目に対して1点を与え、それを集計したものを、YES得点とした(平均値:10.03, 最小値:0.0, 最大値:26.0, 標準偏差は6.08)。全体としては、「いいえ」と答える項目が多かったが、その中で「はい」という項目もいくつかみられた。項目ごとにカイ2乗検定を行ったところ、YES得点が有意に高かったのは、項目4。「あなたは自分の感情や行動がコントロールできていないように感じたことがありますか?」( $\chi^2=10.24, df=1, p<0.01$ )、項目6。「あなたは誰かがあなたについて思わせぶりなことや、二重に受け取れる意味の事を言ったりしていると感じたことはありますか?」( $\chi^2=14.44, df=1, p<.001$ )、項目9。「あなたは見かけとは全く違うという人がいると感じたことはありますか?」( $\chi^2=19.36, df=1, p<.001$ )であった。さらに、各項目とPDI得点の相関係数を求めた所、項目29、34、38を除いた他のすべての項目において、有意な正の相関がみられた。この結果からも、PDIの内的整合性が高いことが再検証されたと言えるであろう。

### 2) PDIと自意識尺度・他者意識尺度についての統計的検定

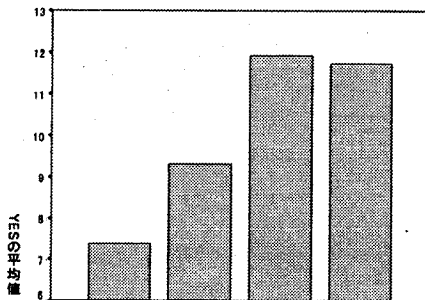
#### ① PDIと自意識尺度・他者意識尺度との関連

まず、男女間のPDI得点の平均についてt検定を行った所、有意差はなかった。そこで、以下、男女込みにして検定を行うことにした。

そして、自意識・他者意識得点の平均値で、被験者を以下の4群に分類し、PDIとの関連を分析した。自意識・他者意識共に高い者をHH群(44名)、自意識が高く他者意識が低い者をHL群(12名)、自意識

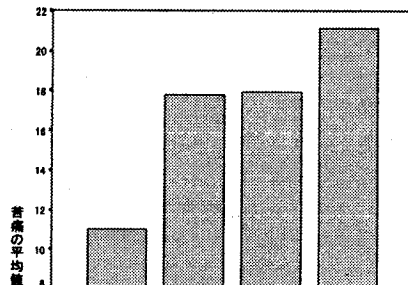
が低く他者意識が高い者を LH 群 (10 名)、両方とも低い者を LL 群 (34 名) とし、YES 得点・苦痛度・心的占有度・確信度との関連について、それぞれ棒グラフで示した (Figure1、2、3、4)。また、PDI の YES 得点を従属変数として、自意識・他者意識との関連を調べる為、二元配置分散分析を行った所、自意識の主効果が YES 得点に関して有意であった ( $F(1, 96) = 6.10, p < .05$ )。さらに、苦痛度・心的占有度・確信度についても同様に分析した。その結果、心的占有度 ( $F(1, 96) = 2.94, p < .10$ ) 及び確信度 ( $F(1, 96) = 3.76, p < .10$ ) において自意識の主効果の傾向がみられた。これらの結果から、自意識の高い者がそうでない者よりも妄想的観念を抱きやすく、心的占有度、確信度とも強い傾向にあることが検証された。いずれの分析においても他者意識の主効果は有意ではなく、明確な結果が得られなかったが、このことは被験者の総数が少ないことに起因しているのかもしれない。

さらに、PDI の YES 得点及び自意識・他者意識の 3 変数の相関関係を調べた所、自意識と他者意識の間に比較的高い相関がみられた ( $r = .68, p < .01$ )。これは、自意識得点の高い者は他者意識も高い傾向にあり、逆もまた然りであることを示している。なお、YES 得点と自意識・他者意識の間に正の相関があることがわかった (自意識:  $r = .41, p < .01$ , 他者意識:  $r = .30, p < .01$ )。この結果と、上の分散分析を総合的にみると、自意識が PDI 得点に関係していることは明らかである。他者意識については、PDI と正の相関のあることは確認できたが、一方で分散分析においては主効果の有意性は示されなかった。しかし、正の相関が存在するという事は、他者意識が何らかの意味で PDI と関係があることを示すものと思われる。そこで、自意識・他者意識の下位尺度が PDI と関係している可能性も考えられる為、そのことについて詳細に分析を試みることにした。



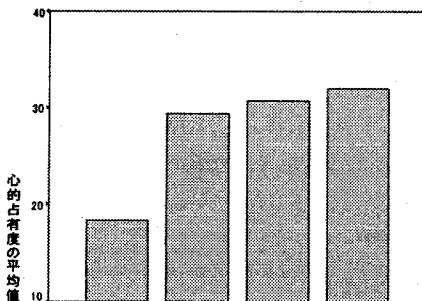
自意識・他者意識

Figure1 YES得点と自意識・他者意識



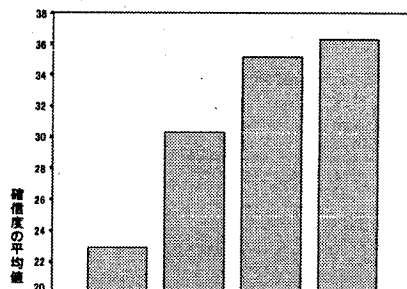
自意識・他者意識

Figure2 苦痛度と自意識・他者意識



自意識・他者意識

Figure3 心的占有度と自意識・他者意識



自意識・他者意識

Figure4 確信度と自意識・他者意識

## ② PDI と自己意識尺度・他者意識尺度の下位尺度との関連

公的自己意識の平均点を基準に、公的自己意識高得点群と公的自己意識低得点群の2群を設定し、YES得点を従属変数として両群の比較をt検定で行った。その結果公的自己意識高得点群が、公的自己意識低得点群より有意にYES得点が高いことがわかった ( $t(98) = 3.45, p < .001$ )。さらに同様の分析を苦痛度、心的占有度、確信度についても行った。いずれの分析においても公的自己意識高得点群が、公的自己意識低得点群より、それぞれの得点が低いことがわかった。苦痛度では ( $t(95.5) = 4.11, p < .001$ )、心的占有度では ( $t(98) = 3.68, p < .001$ )、確信度では ( $t(98) = 3.15, p < .001$ ) となった。次に私的自己意識の平均点を基準に、私的自己意識高得点群と私的自己意識低得点群の2群を設定し、YES得点を従属変数として両群の比較をt検定で行った。その結果私的自己意識高得点群は、私的自己意識低得点群より有意にYES得点が高いことがわかった ( $t(98) = 2.37, p < .05$ )。さらに同様の分析を苦痛度、心的占有度、確信度についても行った。苦痛度では ( $t(95.5) = 1.83, p < .1$ )、心的占有度では ( $t(98) = 1.71, p < .1$ )、確信度では ( $t(98) = 1.97, p < .1$ ) と群の効果はいずれも傾向であった。

妄想的観念と自己意識および他者意識の関連をさらに詳しく分析するために、YES得点を従属変数として、公的自己意識の得点、私的自己意識の得点、内的他者意識の得点、外的他者意識の得点、空想的他者意識の得点を独立変数として重回帰分析を行った。YES得点への標準偏回帰係数が有意だったものは空想的他者意識のみであった。したがって空想的他者意識がYES得点ともっとも関連が強いことが明らかとなった。しかし  $R^2 = .164$  であることから説明率が低く、結果の解釈は慎重に行う必要がある。

**Table 3**  
標準偏回帰係数 (従属変数: YES得点)

独立変数	YES得点
公的自己意識	.190
私的自己意識	.161
内的他者意識	.047
外的他者意識	-.038
空想的他者意識	.405**
$R^2$	.164

\*\* $p < .01$

## 7. まとめと今後の展望

この調査から、PDIの信頼性が検討され、自己意識及び他者意識の高い者、特に、自他両方に対して意識の高い者は、それらの意識が低い者よりも妄想的観念を持ちやすい傾向にあり、それによって強い苦痛を感じていることがわかった。そして、下位尺度を用いた解析では、t検定によって、妄想的観念及び、頻度、心的占有度、確信度に対して公的自己意識が関連していることが示され、重回帰分析においては空想的他者意識が最も関連の強い要素であるという結果が得られた。これらの結果からすると、公的自己意識の強い人、すなわち常に他者のことを気にかけている人は、妄想的観念を抱きやすく、またその妄想的観念によって苦しみ、悩まされる傾向が強いことが推察される。彼らの妄想による苦痛が強いのは、おそらく妄想的観念が心を占めている頻度も高いからであろう。また、彼らは妄想に対して確信度が強く、苦痛や頻度はその確信度の強さと比例しているのかもしれない。これら三者の関係は今後より詳細に検討される必要がある。また、妄想的観念に対して公的自己意識と空想的他者意識が関連を示したという結果から、妄想的観念を持ちやすい人は、何らかの要因によって他者意識が通常よりも活性化されており、それによって空想的他者が「内在他者」に近い形を取って自己の内部に侵入している状態にあると推察できるのではないだろうか。

本研究では、丹野の「公的自己意識が私的自己意識を侵害する事態」という論説の全てを検証できたわけではないが、「空想的他者」すなわち「イメージにおける他者」が妄想的観念と結びついていることに



については、ある程度の見通しが立ったように思われる。しかし、この空想的他者と妄想的観念の関係については、今回の尺度だけでは測り知れない部分を残しており、特に「空想的他者」のイメージについてはその定義やモデルなど根源的な所から見直すべき点が多い。筆者が強調したいのは、「空想的他者」は単なる他者イメージというだけでなく、それが「内在他者として活性化された自己の一部」であるという可能性である。そこで、この「内在他者イメージ」について、その表層的なものに留まらず、多面的な視点から掘り下げるように再検討したいと考えている。

また、今回の分析ではPDIの妄想的観念について、因子分析を行っておらず、一つ一つの妄想的観念項目についても分析が不十分であるので、自意識及び他者意識の高い人がどのような内容の妄想を抱きやすいのか、という点についての分析が現段階では不足している。よって、尺度の改良の為にも妄想観念の内容について、詳しく分析を続けねばならない。また、臨床群に対する診断表を元に作成された質問紙を、健常群に対する質問紙と混在した形で調査することそのものも見直さなければならぬであろう。このように課題が多い中、すでに最新の研究では、PDIは21項目に削減されており、今後はそれらの項目についても調査、検討が必要になっている。特に、ブドゥー教のように本邦においては馴染みの薄い項目が残存しているので、項目の内容に添うように改変したい。現段階では、「あなたはこっくりさんのようなオカルト的なものを信じていますか？」といった項目に変換することを検討中である。

最後に、本研究では被験者数が少なく、十分な解析が行われたかどうかについて不明瞭な点が残る。したがって、今後の目標としては、まず全体の被験者数を増やし、「空想的他者と妄想的観念の関連性」について十分に説明し得るような新たな尺度の導入を模索し、今回よりも結果分析をより明確に説明できるような研究を継続してゆきたいと思う。

## 8. 参考文献

- Garety P A and Hemsley D R (1987): Characteristics of delusional experience. *European Archives of Psychiatry and Neurological Sciences*, 236, 294-298.
- 井村修 (2000a): 精神分裂病とモニタリング障害. 丹野義彦 (編) 現代のエスプリ, 392: 認知行動アプローチ——臨床心理学のニューウェーブ. 136-144.
- 井村修 (2000b): 精神分裂病患者の症状特性と「心の理論」. 心理臨床学研究, 17, 560-569.
- 井村修 (2002): 統合失調症と視点取得能力——統合失調症と一過性精神病患者の比較を通して. 心理学研究, 73, 383-390.
- 石垣琢磨・丹野義彦 (1997): 精神分裂病の陰性症状と Continuous Performance Test. 臨床精神医学, 26, 1199-1205.
- 石垣琢磨・丹野義彦 (1998): 非言語的フィードバックが精神分裂病患者の注意機能に与える影響—continuous performance testにおける指標を用いた分析—. 精神医学, 40 (3), 263-269.
- 石垣琢磨・丹野義彦・道又襟子ら (2000): 幻聴に関する半構造化面接法の開発. 臨床精神医学, 29, 569-574.
- 石垣琢磨 (2001): 幻聴と妄想の認知臨床心理学—精神疾患への症状別アプローチ—. 東京大学出版会.
- Peters E, Joseph S, Day S, Garety P (2004): Measuring delusional ideation: the 21-item Peters et al. Delusions Inventory (PDI). *Schizophrenia Bulletin*, 30(4), 1005-1022.
- Peters ER, Joseph SA, Garety PA (1999): Measurement of delusional ideation in the normal population: introducing the PDI (Peters et al. Delusions Inventory). *Schizophrenia Bulletin*, 25(3), 553-576.
- Richard P. Bentall, Sue Kaney, Michael E. Dewey (1991): Paranoia and social reasoning: An attribution theory analysis. *British Journal of Clinical Psychology*, 30, 13-23.
- 菅原健介 (1984): 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み. 心理学研究, 55, 184-188.
- 丹野義彦・丹野ひろみ (1987): 社会心理学的自己認知理論からみた精神分裂病の自己の病理—公的自己意識が私的自己意識を侵害する事態について—. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8, 47-58.
- 丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 (2000): 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成. 心理学研究, 71 (5), 379-386.
- 丹野義彦 (2001): エビデンス臨床心理学—認知行動理論の最前線. 日本評論社.
- 辻平治郎 (1993): 自己意識と他者意識. 北大路書房.

山崎修道・田中伸一郎・森本幸子・山末英典・岩波明・丹野義彦 (2004) : Peters et al Delusion Inventory (PDI)  
日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討. 臨床精神医学, 33 (7), 911-918.

9. 添付資料 PDI (日本語版) 質問紙

この項目は考え方についてお尋ねするものです。以下に普通の人にも良く見られる考え方や体験が書かれています。正しい答えや間違った答えというものはありません。できるだけすべての質問に答えてください。  質問に「はい」と答えた場合には、そのような体験が、①どのくらい苦痛か、②どのくらい頻繁に考えるか、③どのくらい本当だと思うか、を答えてください。①②③については、ページの右側にある 1~5 のうち最もあてはまるものに丸をつけてください。		① どのくらい苦痛か	② どのくらい頻繁に考えるか	③ どのくらい本当だと思うか
		とても苦痛である かなり苦痛である どちらでもない あまり苦痛でない 全く苦痛でない	いつも考えている かなり考えている どちらでもない あまり考えたことがない ほとんど考えたことがない	完全に本当だと思う かなり本当だと思う どちらでもない あまり本当だと思わない 全く本当だと思わない
1. あなたは何かの力によってコントロールされているかのように感じたことがありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
2. あなたはまるで意志を持たないロボットか抜け殻みたいに、人やものにとりつかれているかのように感じたことがありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
3. あなたは自分自身ではない他の力によって、自分が支配されているという感じはありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
4. あなたは自分の感情や行動がコントロールできていないように感じたことがありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
5. あなたは人やものが、あなたの心を操っているように感じたことがありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
6. あなたは誰かがあなたについて思わせぶりなことや、二重に受け取れる意味のことを言ったりしていると感じたことはありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
7. あなたはテレビや新聞などを見て、これは自分のことを言っているのだと感じたことがありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
8. あなたは誰もかれもあなたの噂をしているかのように感じたことがありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
9. あなたは見かけとは全く違うという人がいると感じたことはありますか?	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
10. あなたは周りの物事が現実的でなかったり、まるであなたを試すための実験が行われているかのように感	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

じたことがありますか？				
11. あなたは誰かがあなたをわざと傷つけようとしているかのように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
12. あなたは何らかの方法で迫害されているように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
13. あなたはあなたに対する陰謀があるように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
14. あなたはある組織や機関(暴力団のような)があなたに恨みを抱いていると感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
15. あなたは誰かもしくは何かがあなたを見張っているように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
16. あなたは特別な能力や権力などを持っているように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
17. あなたはあなたの人生に特別な目標や使命があるように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
18. あなたは不思議な力が働いて世の中を良くしているように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
19. あなたは自分が重要人物である、または重要人物になると運命付けられているように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
20. あなたは自分がとても特別な、もしくは普通でない人間であるかのように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
21. あなたは自分がキリストや神・仏に特に近いように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
22. あなたは人間はテレパシーで通信できると思いますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
23. あなたはコンピュータのような電子機械があなたの考えに影響を与えるように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
24. あなたはあなたの周りに奇妙な方法であなたに影響を与える力があ	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

るように感じたことがありますか？				
25. あなたは何らかの方法で、神に選ばれたように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
26. あなたは魔法やブードゥー教、オカルト的な力を信じていますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
27. あなたは配偶者やパートナーが浮気をしているかもしれないいつも心配していますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
28. あなたは自分の臭いで他の人が不快になっていると思いますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
29. あなたは特殊な方法で自分の体が変わったように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
30. あなたは見知らぬ他人が自分とセックスしたがついていると思いますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
31. あなたは普通の人よりも自分は罪深いと感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
32. あなたは自分の外見のせいで他の人が自分を奇異な目で見ていますと感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
33. あなたは頭の中の考えが全くなってしまうように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
34. あなたは体の中が腐っているかもしれないように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
35. あなたは世界が終わるように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
36. あなたは自分の考えが異質なものに感じられますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
37. あなたは自分の考えが鮮明すぎて他人に聞こえているのではないかと心配になりますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
38. あなたは自分の考えが反響して自分に返ってくるように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
39. あなたは自分の考えが誰かもしくは何かに邪魔されているように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
40. あなたは他人が自分の考えを読むことができるように感じたことがありますか？	はい・いいえ	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

## **The Relation between Delusional Ideation and self/others Consciousness in Adolescence.**

ISHIMITSU Miki

In this study, the author investigated and analyzed the items of PDI which was originally devised by Peters (1999). The Japanese version was translated by Tanno et. al. (2004). The result of this study showed that PDI had sufficient reliability. The analysis between PDI and self/others consciousness revealed that the subjects who had high scores in self-consciousness showed high scores in PDI. Further analysis between PDI and sub-scales of self/others consciousness showed that the subjects who had high scores in public-self-consciousness and imaginal-others-consciousness *tended to have delusional ideations. They complained strong distress about their delusional ideations. And they also showed high scores of preoccupation and conviction with their delusional ideations compared to the subjects who showed low scores in the both above scales.* The results of this study suggested that PDI was a useful and reliable scale to measure delusional ideations in normal population as the former studies insisted. But the conclusion of this study should be reserved because the size of subjects was somewhat small and the variety of sampling was limited. Further studies are needed to clarify the results of this study.